

ロンドン滞在記(孫はロンドンナー)①

二人の孫が「ばあば会いたかった〜」 上村 文香

娘のパートナーが、フルタイムフルタイムからロンドンに転職になった。娘一家がロンドンに住んでい

るうちにイギリスに旅行に行きたい、孫にも一年近く会って会えないで思いきって会いに行

くことにした。夫は、誘っても行きたがらないので一人で行くことにし

た。娘に連絡し、コッツウォルズと湖水地方に

は絶対行きたいとリクエストした。暮らすよ

うに旅をしたいと思っ

たので、娘の家で世話になりながら、日々地

下鉄やバスに乗ってロンドンの有名な場所に行

った。というか連れて行ってもらったというべき

か。娘が通販で買ったさまざまな日用品、お菓子、調味料、文房具、2

歳の誕生日を迎える孫へのプレゼントや洋服、お煎餅を2個のスーツ

ケースに詰め、手提げ袋をその上にセットし

ていざ出発。でもちっさいおばさんがこんな

たくさんの荷物を持っていて、運び屋に間違

えられないか心配になっ

たがノーチェックだった。飛行機はなるべく時

差ほけにならないよう朝の便にした。周りの人はスヤスヤ寝ているが、全く寝られなくて映画を5本も見てしまっ

た。今はロシア上空を飛べないので、昔のようにアンカレッジ経由で時間がかかり、15時間のフライトであった。隣の席に座っていた娘さんが小さい頃ロンドンに住んでいて留学

もしていたが、こんな時間がかかるとは

言っていた。ヒースロー空港に到着し、入国審査でま

ずびつくり。5年ぶりの海外旅行なので、パスポートを機械にかざす

システムに変わっていた。うまく反応しないので有

人のブースで「娘を訪ねて来ました」と言う

とスランプもなしで入国。そして、出口を出ると

娘のパートナーが待

っていてくれてほっとする。空港から高速道路を

30分位走り、住宅が立ち並ぶ通りに入った。娘

たちが住んでいるのは、アクトンタウンという町

で日本人学校があり、日本人が多く住んでい

る。治安も良いとのことである。シティ等の中心

部のすぐ外にあり、そこをグレイターロンドンという

ところである。近くに地下鉄の駅もあり中心部への便も

良い所である。そして、ロンドンっ子

のことをロンドン

ナーと言うのだが、パリジェンヌとかニューヨーク

カーは格好いいけど、ロンドンナーはちよつと間がぬけているよう



が「ばあば、会いたかった」と抱きついてきた。私も、久しぶりの再会に嬉しくてハグ

早速お土産を手渡し、2時間位お昼寝をする。お陰で時

差ボケもなくそれ以降元気に過ごすことができた。

二人の孫は、それぞれナーサリーに通っている。兄は3歳で公立のナーサリーに毎日通園している。費用は学期毎に約12万円、妹は乳児で私立の為、フルで通うと20万円位かかるので、月

水、金に通園している。私が子育てをして

いる時は、保育園に通わせていたので、つい

保育園と言ってしまう。すると、「ばあば、僕が行

つてるのはナーサリーだよ」との返事が返

ってきた。到着翌日は、金曜日だったので一

緒に幼稚園へ送っていった。8時半には

家を出て大通りに出ると、母親に連れられ

た子どもや学校へ急ぐ中学生、高校生で溢

れていた。小学校3年生まで登園するようにな

った。孫は4月から通い始め、登園の際は泣

くことがあつたそうだが、この日は必死に涙

をこらえていていじらしかった。そして、この日以降笑顔で登園するようになった。

高退協読書会案内

8月例会は「吉野源三郎の生涯：平和の意志 編集の力」 岩倉博(著)を課題本に高橋泰宏、樋口真雄、山本晶子、井上圭介、大川法由記の5名で行われました。吉野源三郎を語るうちに自然と次回例会は彼の著作「君たちはどう生きるか」になりました。参加希望者は直接お越しください。



第194回(10月例会) 10月19日(木)14:00
ムトー荘2F(205号室) 参加費 600円(会場使用料)
【テキスト】「君たちはどう生きるか」(吉野源三郎著)(岩波文庫)写真 左:文庫本 右:単行本(ソフトカバー)
【書評】『君たちはどう生きるか』は1937年の吉野源三郎の小説。コペルというあだ名の15歳の少年・本田潤一とその叔父が、精神的な成長、貧困、人間としての総合的な体験と向き合う姿を描く。当初、『日本少国民文庫』の最終刊として編纂者山本有三みずから執筆する予定であったが、病身のため代わって吉野が筆をとることになったとされる。1937年に新潮社から出版され、戦後になって語彙を平易にするなどの変更が加えられてポプラ社や岩波書店から出版された。児童文学の形をとった養育の古典としても知られる。[Wikipedia]